誓いは彼女の為に

ユリシー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

風変わりな提督が、ラバウル基地鎮守府にいた。

戦いの最前線で戦う提督が。

『刀』を持ち、艦娘と肩を並べて戦う提督が。

曰く、提督は血濡れだと。

曰く、その鎮守府は、化け物の巣窟だと。

……護るために。

ただそれだけの為に、彼は刀を振るう。

例え他人から認められなくとも。

他人からどのような評価を受けようとも。
――――彼女との誓いは、果たさなければ。

※艦娘、深海棲艦、さらには提督にも、独自設定、独自解釈を含みます。
※提督が戦います。しかも異常に強いです。強さ以外も異常です。
※感想、評価を頂けると幸いです。誤字脱字も、教えて下さると有難いです。

目次

プロローグ ―― 1
零章　彼女への誓い
作戦記録　２０３２年４月２０日　セレベス海 ―― 7
一章　南方鎮守府の風変わりな提督
一話　着任 ―― 15
二話　邂逅 ―― 20
三話　対面 ―― 26
四話　襲撃 ―― 33
五話　背水 ―― 39
六話　迅雷 ―― 46
七話　飛翔 ―― 53
八話　母港 ―― 65
九話　演習 ―― 73

プロローグ

……戦いは終わらない。

『あの日』から長い月日が経ったが、戦いは終わる気配を見せない。

《深海棲艦》という強大な敵を前にして、人類は果敢に戦った。

多大な犠牲を払った。多大な被害を被った。

しかし、それでも終わらない。

自分も、他の大多数と同じように、こう思った。

――――勝てないのだ、と。

倒しても倒しても一向に戦力の衰えない《深海棲艦》に対して、

彼は絶望していた。

――――いつになれば終わるのだ、と。

彼は諦めていた。

――――どうしようもない、と。

ある戦いで、彼は瀕死の重傷を負った。

それまで彼は、決して深い傷を負った事が無かったのに。
それは、彼が深海棲艦との戦いで絶望していたのが原因なのか、
或いは、それまでの激戦からくる疲労故なのか、
はたまた、彼の運がたまたま良かっただけなのか。
どうでもよかった。
事実彼の傷は相当に深いものであったし、すぐに処置が必要なものであった。
勿論、最前線である彼の居場所に、応急処置ができる衛生兵などはおらず。
だからこそ、どうでもよかった。
どうせ、死にゆく運命。
この世界に、未練がないわけではなかったが、
もう、いいのだと思った。
眼前に、《深海棲艦》、その戦艦旗艦型（フラッグシップタイプ）――タ級――が立つ。
主砲を構え、自分の方へ向けてくる。
この至近距離では、外すはずもない。
嗤っているのだろうか、怒っているのだろうか。
分からないし、最早それを判断するだけの余裕など無かった。
目をゆっくりと閉じて、静かに最期を待つ。

程なくして轟音が響き、そこで……

彼の意識は途切れるはずだった。

な、とつぶやきが零れる。

眼前にいたタ級は、大きく姿勢を崩し、とっさに彼のもとから離れた。

――そんな馬鹿な。

周りを見渡しても、海軍所属の軍艦、駆逐艦などは見当たらない。

では何故？

答えは見つからなかったが、その代わりに一人の少女を見つけた。

体に纏っているのは、戦艦の主砲を幾分か小さくしたようなものや、

軍艦の船体を意識したかのような装甲。

「さあ、やるわ。砲雷撃戦、用意！」

余裕を含んだ表情を浮かべた彼女がそう言うと、彼女の装備品が火を噴いた。

打ち出されたのは、砲弾。

九発の弾道が、空に弧を描く。

それは寸分違わずタ級に命中し、断末魔を上げながら、タ級は沈んでいった。

――――鮮やかなものだ、と。
彼は内心呟く。
いや、あまりの出来事に対し言葉が出ない、と言った方が正しい。

段々と、その少女は、自分に近づいてくる。
警戒しなかった訳ではないが、もう彼に体を動かすだけの力はなく。
ただ彼女を、近づいてくる少女を見ることしか出来なかった。
彼女の顔がはっきり見えた所で、彼女が口を開いた。
「貴方を、助けに参りました。」
……助けに？
ということは、少なくとも味方、なのだろう。
少しだけ張りつめていた気を緩ませる。
「名前、は？」
傷のせいでまともに話せない。
頭の中に浮かんだ質問の中で唯一口にできるものがこれだった。
彼女は少し考える仕草をとった。
「……名前、ですか。

　私には、そんなもの……」
名前が無い？
自分のような戦場しか知らない自分にも――識別の為にだが――名前はある。
ならば彼女は、人に語ることのできる名前を持っていないのだろうか。
「何でも、構わない。君のことを、忘れないよう、に、したいだけだから。」
掠れた声で言う。
情けない声だ、と自分でも思ったが、この際仕方がない。
すると彼女は、もう一度考え始め、得心が行く結論を出したのだろう。
自分の方を見て、言った。
「では、私の事は、『大和』とお呼び下さい。
　在りし日の戦艦大和の如く、貴方を護り通しますから！」
……大和。
確かに、彼女にはその名が似合う。
護り通す、そう言ってくれるのであれば。
――少しだけ、ほんの少しだけ、休んでもいいよな。
その少し後。
彼の意識は、今度こそ途切れたのだった。

零章　彼女への誓い

作戦記録　２０３２年４月２０日　セレベス海

天候：豪雨後快晴
波：やや高し
風：南東に５ノット
作戦内容：第二〇一特務部隊による敵棲地の攻略
戦力：第二〇一特務部隊
　隊長　榊原祐翔大尉
　以下三名
敵戦力：戦艦　十（内姫級二隻）
　空母　五（内鬼級三隻）
　重巡　二十（内姫級一隻）
　その他護衛艦多数
「こちらＳＴ１リーダー。各員応答願う」
『はいはい。こちらはＳＴ１―０１異常なしでーす』

『こちらはＳＴ１―０２。状態良好。０１、もう少し緊張感を持て』
またか、と思いつつも思わず溜息をついてしまう。
いつも通りのやり取り。
定時連絡の時は必ず起きるシチュエーション。
ただ一つだけ、今回は違う所がある。
「……あのー……もしかして、いつもこんな感じなんですか？」
自分の様子を見たからか、横から一人の少女が声を掛けてくる。
前回の作戦時、自分の命を救ってくれた人。
自分に希望を与えてくれた人。
――――自分が、背中を預けられる人。
「あ、ああ。そうだな、いつも通りだ」
だがどうしてなのか分からないが、彼女と話すときは妙に緊張してしまう。
『あれ、リーダー何か変ですね』
『そうだな、アイツらしくない。歯切れが悪いな』
通信機から聞こえてくる内容は頭に入ってこず、ただ目の前の彼女との会話に気を取られていた。
「今はこんな感じだが、戦闘の時は良く行動してくれる」

「そうですか。貴方がそういうのなら安心ですね」
自分の事を見つめてにこやかにそう言う彼女。
あの時、自分を助けてくれた時の凛々しい表情から一転、満開の桜のように朗らかで……
いや、柄にも無いことを考えてしまっていた。
作戦前の思考ではない。
そんなことを考えている暇はないんだ。
「各員傾注。これより作戦内容について説明する」
『はーい』
『了解した』
「分かりました」
最初の二人は何か含んだような返答だったが……
まあいい。
とりあえず自分の役目を果たすべきだな。

備考：本作戦では、個体名『大和』、ひいては『艦娘』の初の実戦投入が行われた。

「大和、偵察状況は？」
「まだ、見つかってません」
作戦海域へ到着し、偵察を開始するも未だ敵は見えず。
しかし大和の持つ偵察機のお陰で大分気が楽だ。
今まで今回のような作戦では偵察機の援護は望めなかったが、大和の持つ艦載機のお陰で偵察が出来る。
肉眼での偵察程骨が折れることは無い。
一応他二人にも索敵を命じてあるが、彼らも気が楽だろう。
と、途端に大和の表情が硬くなる。
「敵艦を発見！数十二！」
ようやくか。
腰にある刀を握りしめる。
柄に手を掛け抜刀の用意をする。
「総員戦闘隊形へ移行。０１と０２にて先制攻撃」
『０１了解。斬り込みます！』

『０２了解。狙撃にて旗艦を狙う』
敵艦に最も近かった二人が先に攻撃を開始する。
まず響くは銃声。
０２の放った銃弾が敵旗艦と思しき個体へと命中する。
敵艦隊に動揺が走った隙に０１が肉薄する。
薙刀を手にした彼女は敵に一瞬で近付き、そしてひと振りで敵艦二隻を撃沈させる。
『ほらほら！そんなんじゃ私は止められないよ！』
敵陣地をかき回していく彼女に続いて、自分と大和が攻撃を仕掛ける。
「大和、砲撃を頼めるか」
「ええ。勿論です」
大和が艤装を完全展開し、主砲を敵艦に向け照準。
「第一、第二主砲。斉射、始め！」
凄まじい轟音が立ち、砲弾が発射される。
そしてそれはやはり正確に敵艦に命中。
敵艦は大破炎上。
一面炎で照らされる中、最後に自分が刀を抜く。
心は静かに、しかし動きは大胆に。

敵艦隊の混乱が収まる前に、敵艦隊に逃げられる前に。
「逃がさない」
最後に残っていた敵艦三隻を一閃にて切り伏せる。
発見した敵艦隊の全ての撃沈を確認した所で、新たに通信が入る。
『リーダー。八時の方向から敵艦隊。数からして敵棲地も近いはずだ』
０２からの通信だった。
ちょうどいい。このまま突っ切れば敵棲地も見えるだろう。
「各員に告ぐ。引き続き新たに発見した敵艦隊への攻撃を開始する。先の隊形を維持しつつ敵中を突破する」
『よーし、まだまだ暴れるよー！』
『まったくお前は……リーダー、こちらも先行して敵艦を叩く』
「了解。いつも通りで構わない」
指示を終えてから大和に向き直る。
「大和、今から長丁場になる。準備は……」
「リーダー」
途中で遮られる。
もしかして、何か不具合が……

そう思っていた自分を見つめて、大和が言う。
「私は、貴方を護り通すと言ったのです。必ず、何処までも、一緒に行きます」
強い決意を持った瞳だった。
自分にはそれほどまでにさせる理由は分からなかったが……
「分かった。一緒に行こう」
そう言ってくれる人に、せめて自分は応えたいと思って、大和の手をとる。
それに対して大和は何故か少しだけ頬を赤らめたが、しかしすぐに頷いた。
『接敵！まずは一つ撃ち抜く！』
『こっちも負けないよー！』
聞くと、既に０１と０２が交戦を開始したようだ。
遅れるわけにはいかない。
「君が護ると言うのなら」
刀を抜きながら大和へ向け言う。
「自分も、この刀に誓って言おう」
自分に対して、大和に対して、皆に対して。
『護り通す』、今はその為に、戦うと」
目の前の敵を切り伏せて、燃え盛る海の上を駆け抜けた。

一章　南方鎮守府の風変わりな提督

一話　着任

最近の鎮守府は、異動が激しい。
私がこの前呉第二鎮守府に着任したのが一年前。
今私は、そこではない、新たな鎮守府に出向こうとしている。
ほかの艦娘がどうなのかは知らないけれど、普通、私のように一年で異動なんてないだろう。
結果オーライだと言えば、確かにそうだ。
呉は、私にとってとても居心地が悪かった。
提督が、気に食わなかった。
別に私は、見た目とかそういうので気に食わなかった訳ではない。
彼のその性根が、余りにも悪かったからだ。
艦娘を道具、兵器としか見ておらず、自分たちのことを酷使し続けた。
その結果、確かにそれなりの戦果を得られたのだろう。
彼は進級を重ねていった。

それが、気に食わなかった。
自分たちへの扱いは、表面的にはよくしていて。
ただ、私たちへの扱いはその実とても悪く。
だから私は、憲兵隊、ついで大本営にその事実を伝えた。
証拠も提示して、彼が言い逃れできないようにした。
そこまでした甲斐もあって、その提督は勲章は没収、階級は降等となった。
結局、その提督は呉第二鎮守府から離れることになったが、
困ったことに、その代理の提督がいないのだと、大本営から通達があった。
代わりに、私たち呉第二鎮守府所属艦娘は、各地の鎮守府へ異動となった。
事実上、過去の私たちの鎮守府は無くなったのだ。

私が配属先だと言い渡されたのは、太平洋戦線屈指の激戦地、『ラバウル』。
その第一鎮守府だった。
激戦地、と聞いて少し身構えたが、
前の鎮守府よりかはマシだと考えた。
まあ、次の提督も前の提督のような人物であれば、
――『艦載機』を飛ばしてやるんだから、と心の中で呟く。

と、窓の外を見て考え事をしていたが。
ふと自分に声が掛けられる。
「そろそろ到着です。降機の用意をお願いします。」
機長だった。
ありがとうございます、と、簡単な礼をして再び窓の外を見る。
……あれかな。
今までは、一面海ばかりだったが、島影がようやく見えてきた。
きれいな島だ、というのが第一印象だった。
ニューブリテン島、だっただろうか。
この辺りの地理は、先日少し触れただけなのであまり自信がない。
近くには山――調べたところでは火山――が、多くある。
有名なのは《花吹山》と、《西吹山》だが、未だに火山活動が活発なようだ。
鎮守府らしき物も見えてきた。
やはり、というべきだろう。
赤レンガ造りの、それこそ呉で何度も見た物とよく似ていた。
呉での出来事を少し思い出してしまい、

少々気分が悪くなったが、今一度その思いを捨て去る。
過去の出来事を引きずっていては、
提督への着任挨拶での第一印象に響くかもしれない。
それでは、今後の鎮守府での生活に悪影響を及ぼしてしまう。
それだけは、避けたかった。
「……よし！」
頬を両手で叩いて気を引き締める。
さあ、もうすぐ滑走路に到着。
兎にも角にも、挨拶はしっかりとしないと。

＊＊＊＊＊

二話　邂逅

機体が滑走路に着陸した。
多少の揺れはあったものの、特に身構えることもなかった。
――――零式輸送機――――
この機体の優秀さもさることながら、機長の腕は確かだろう。
安定した着地だった。
タラップが降りる。
機体の外の空気を噛みしめながら、
今一度機長への感謝の意を込め、敬礼をする。
機長もそれに答礼で返し、短く、
――――ご武運を。
と添えた。
その目は何処か我が娘を心配するかのような、
自分の教え子の巣立ちを見送るかのような……。
初めて出会った人物だったが、その彼の顔は忘れることはないだろう。

見送る顔というものは、得てして記憶にとどまり続けるのだから。
『あの頃』に味わった思いは、忘れられるわけがないのだから。
数秒ほどの逡巡の後、タラップを降り始めた。
……振り向かない。私は振り向かない。
それが私の、航空母艦『瑞鶴』の英姿を表すのだと信じて。

タラップを降り終わった後、一人の艦娘が私に近づいてきた。
彼女はこの鎮守府の艦娘だろう。
彼女の先には、機内から見た赤レンガが見える。
ただ、その近づいてきた艦娘の顔を見て、私は目を見開いた。
「……翔鶴姉！」
「あら、瑞鶴なの!?
　久しぶりね！元気にしてた？」
声を掛けた相手――『翔鶴』――が顔に喜色を浮かべて、
こちらに近づいてきた。
「もちろん、……とは言えないけど。」

久しぶりに会った姉を気遣う言葉を掛けようと思ったが、
自分の配属理由を思い浮かべ、少し濁してしまった。
ああ、駄目だ。
移動中の機内で気持ちに区切りを付けたはずなのに。
しかしどうしたって明るく振舞えない。
前の出来事はそれほどまでに辛く、苦しい記憶なのだから。
「……そう。瑞鶴、無理はしないでね。
あなたのその顔を見れば、ここに来た理由の想像は付くわ。」
優しく声を掛けてくれる姉。
前から優しいことはよくわかっていたが、こういう時には、その優しさが身に染みる。
「それに、心配することはないわ。
私たちの提督は、あなたが考える提督よりも、ずっと『軍人らしくない』人だから。」
……軍人らしくない？
それはどういうことだろう。
軍紀を守らないだらしがない提督？
――それなら私の艦載機で爆撃しよう。
自分の責任を自覚していない提督？

――――これも爆撃ね。
いくつか『軍人らしくない』提督について考えてみたが、
如何せん良い印象を浮かべられなかった。
しかし、自分の姉がそんな提督に付き従う訳がない。
私の姉がおしとやかな淑女、というだけの人物ではないことは知っている。
それに、翔鶴姉の紹介の仕方は、
此処の鎮守府の提督に、希望を持って良いと思わせるようなものだった。
――――だとしたら。
此処の提督は、どのような人物なのだろうか。
少し思いを巡らせていた私の考えが遮られる。
翔鶴姉が、私の手を取って歩き出したからだ。
「わっ、え、ちょっと、翔鶴姉？」
「いいから。あまり考えすぎなくていいわよ。
今から提督の執務室に連れていくけど、
貴女は、挨拶を噛まないようにすることだけ考えていればいいから。」
多少強引に連れていかれる。
私の緊張を解そうとしてくれたのだろうけど、

翔鶴姉の顔を見るに、それだけじゃない気がしてきた。
……すごくうれしそうだ。
鼻歌まで歌っている。どうして？

「瑞鶴。ここよ。」
と、何時の間にか執務室の前に到着していた。
慌てて自分の身だしなみを整える。
――髪は大丈夫かな？
――声は？顔は？
隣で翔鶴姉が苦笑していた。
……ああ、そうだった。
考えすぎないようにって、翔鶴姉に言われてたのに。
うん。考えすぎない、思いすぎない。
少し深呼吸をして、気持ちを落ち着かせる。
大丈夫、大丈夫。
そうやって少し間をおいて、ドアをノックする。
「翔鶴型航空母艦、二番艦瑞鶴。入ります！」

重厚なドアが軋み音を上げながら、ゆっくりと開いていった。

三話　対面

ドアを開けた先にいたのは、一人の男性――提督のような――だった。
海軍第二種軍装を着用し、執務用だろう机に座っていたその人物は、
入室した私を見て、徐に立ち上がった。
そして、私の目の前に来て、そこで立ち止まった。
……背が高い。
私より十五ｃｍ程は大きいだろう。
その所為で、少し緊張が走る。
やがて目の前の彼が口を開いて、こう言った。
「初めまして。そして、ようこそ。
　ラバウル第一鎮守府へ。」
初めは少しだけ険のある顔だったが、今ではすっかり柔和な笑みを浮かべていた。
少しだけ、安堵する。
「私は『榊原（さかきばら）　祐翔（ゆうと）』という者だ。
　海軍少将を務めている。

　また、この鎮守府を預かる提督でもある。」
……？
どうして自分の名前を言ったのだろう？
前の提督は言っていなかったが、それが普通ではないのだろうか。
私の疑問は解消されないままだったが、
少し間をおいて、彼――榊原提督――が再び口を開く。
「一つ、聞きたいことが。
　君にとって、提督とは、どのような存在なのだろうか？」
――どのような存在……
少しだけ考えてみる。
思い出すのは、呉での提督。
思えば彼は、非常に出世欲が深い人間だった。
そして私たち艦娘は、その出世のための道具だった。
出世の為ならば……
私たちに愛想をふりまく。
私たちに優しく接する。
私たちに褒美を与える。

しかし、少しでも私たちが彼の満足のいく結果を出せなかった場合は……
私たちを虐げる。
私たちを罵る。
私たちを酷使する。
「私にとって、提督とは……
　上手く言えませんが、ただ一つだけ言えることが。
　それは、『上官』であることです。」
私がまだ『艦』だった頃。
『後方』で「死んで来い」、と命令する上官がいたことを覚えている。
危険な戦場へ兵たちを行かせ、上官である彼らはそこへは行かず。
ただ机上の空論で練り上げた作戦に従わせ、兵たちを殺していた上官がいたことを。
「今の私は、そのような感想しか言えません。
　少なくとも、私が呉で見た提督は、それ以上の存在ではありません。」
気が付けば、自分は握り拳に力を強く込めていた。
……過去のことは、やはり忘れられない。
呉での出来事、
そして、『艦』の時に見た様々な光景。

――――自分も、その命令で――――

「君は、強いな。

　しかし、それ故に、脆い。」

ふと、目の前にいる提督が口を開く。

俯きながら考えていた瑞鶴が顔を上げ、

その提督の顔を見る。

――――悲しんでいる？

彼は、沈痛な面持ちだった。

顔に浮かべているその表情は、瑞鶴にとっては意外だった。

提督という者が、こんな表情をするのか、そしてしていただろうか。

自分のこと以外で、こんなにも悲しそうにするものなのだろうか。

そもそも、たった二度の発言で、それもあの内容で、

どうしてそんな表情を。

『貴女が考える提督よりも、ずっと……』

ついさっき、翔鶴姉が話していた事を思い出す。

――――『軍人らしくない』――――

確かに、そうなのかもしれない。

それも、将官クラスの軍人が、だ。
「ありがとう。君の気持ちは伝わった。
君はそれを話してくれた。
ならば自分も、少しだけ、自分の事を話そう。」
一拍置いて、提督が口を開く。
「私は、君たちの『司令官』でありたいと思っている。
決して、『上官』でも『上司』でもない。」
司令官……?
上官でも上司でもなく?
「まだ、その意味が分からなくてもいい。
ただこれが、自分の所信表明だ。」
戸惑う表情を見せた私を見て、なのか。
提督はもう一つ言葉を添えた。
すると、ふと提督が手を差し出してきた。
「まずは、握手をしよう。
友好関係というのは、これからだろう?」
どうにも分からない。

彼が何を望んでいて、何を得たいのかが。
自分が知っている提督とは違う、ということだけは分かるが。
ただ、何となく。
あくまで直感だが、彼は手を取るべき人だと思った。
もし彼が『司令官』という『上官』でも『上司』でもない存在ならば……
「私は、貴方に少しだけ期待します。
　ですがもし、私の期待にそぐわない人物であるなら……」
――――貴方を爆撃しますから――――
言おうとして、言わなかった。
初対面の相手、しかも提督相手だからだ。
まあ、気まぐれもあるが。
翔鶴姉が話す姿はとても楽しそうだったから。
翔鶴姉がそこまで楽しそうだった理由に興味があるから。
「フフッ。
　君は中々面白い者のようだ。」
その言葉を聴いて、私は彼の手を握る。
「翔鶴型航空母艦二番艦、瑞鶴。

只今ラバウル第一鎮守府に着任しました。」

四話　襲撃

私の思考が中断されたのは、そのほんの僅か後の事だった。
突然鳴り響くけたたましい音。
聞くだけで人を不快な思いにさせ、とっさに防衛本能を呼び起こす音。
そんな音の正体は、戦地に程近いここにおいて一つしかない。
加えて、私が呉で何度も聞いた音。
そう、警報だ。
「提督、敵の襲撃です！」
執務室の扉を開け放ち、そう言って来たのは大淀だった。
そして私の予測も、外れていなかったのが分かった。
「敵の座標、規模、そして周囲の味方艦隊の数の報告を。」
提督はそれに動じた素振りは見せず、冷静に対応していた。
ここは最前線であるから、だろう。
歴戦の提督であることは、まず間違いはなかった。
（呉の提督は、こんなに冷静じゃなかったな……）

彼は、海軍に勤務してもう十年は経っていたはずだが、
それでも突然の襲撃となると、かなり慌てふためいていた。
そんな者はまず、この前線には配属されるはずがないだろうが。
「了解です。」
大淀が、状況を説明を始める。
その話をまとめると、
まず、敵は当鎮守府より北西に五十キロに位置している。
そして規模としては、戦艦五隻、空母二隻、重巡三隻、その他護衛艦二十隻余り。
味方艦隊は、哨戒中の水雷戦隊一個で、戦力に不安があるという。
また、すでに交戦を開始しており、救援に向かう必要があるとのこと。
「私が出よう。」
提督が短くそう告げた。
すると、徐にそばの太刀掛から刀を取り、立ち上がった。
「え……
　ちょっと待ってください。
　まさか、提督ご自身が出撃されるおつもりですか！」
軍人という者は、刀を手にして戦場へ往く。

それが礼節というもので、刀を佩しておきながら戦場へ往かぬ、ということは有り得ない。
それを承知の上で刀を取っているのだとしたら……
「ああ、勿論だ。
言っただろう？
私は『上官』ではなく、『司令官』だと。」
――言葉が出ない。
おかしい、余りにも馬鹿げているとしか思えない。
直感で分かる。
この提督は、――他とは違うと。
この提督は、――常人（ただもの）ではないと。
「大淀、鎮守府近海に、待機中の第三水雷戦隊を回してくれ。
戦艦中心の水上打撃部隊は戦闘態勢へ。」
「了解しました。」
一礼をして、大淀は執務室を後にする。
提督ほどとはいかなくても、彼女も十分に素早く対応している。
前線部隊の実力を垣間見たような気がした。

「それと……翔鶴、君にも頼みたい。」
「はい、何でしょう提督。……私のこと、お忘れになっていたのかと……」
冷静な所作ながらも若干食い気味になってそう答える翔鶴姉。
……うん。何だか変だ、翔鶴姉。
私が知っている翔鶴姉は、自分の感情を表に出すようなことはしないはずなのに。
その発言に対し、提督は、すまない、と気まずそうに謝罪していた。
さっきまで冷静だった提督がそういう風にしているのは少し可笑しかったけれど。
「それでだが、君に航空隊の編成を頼みたい。
空母航空隊、必要であれば基地航空隊も。それを使って戦場への航空支援をしてほしい。」
「了解しました。では、私からも一つ、御願いを。」
そう言うと翔鶴姉は私に一瞬目配せをした。
「瑞鶴を、出撃させても宜しいでしょうか。」
「えっ……ええっ!?」
思わず声が出てしまった。
――ここに来て直ぐなのに、もう出撃!?
「瑞鶴の驚き、もっともだ。こちらへ来てまだ間もない。その上慣れない環境だ。

今回は待機させても良いのではないだろうか。」
提督も私と同じで、その提案に驚いた様子だった。
それに加え、出撃にも消極的だ。
「ですが提督。瑞鶴の技量が何れ程か、一度ご覧になるべきです。
将来は『飛鷹先輩』と肩を並べられると思うのですが。」
翔鶴姉がそう言い終わると、提督の目付きが変わる。
「本当か。」と、今までより少し低い声で尋ねる。
――――飛鷹さん、という人は、それだけ強い人なんだ。
その人がとても気になったが、それと同時に、自分は翔鶴姉に其ほどの期待を持たれているということに驚いた。
「ええ。私が保証します。妹の実力は折り紙付きですよ。」
……相当期待されている。
お陰で私の緊張もどんどんゲージが貯まっていき、終いには顔がひきつりだした。
「行けそうか、瑞鶴？決めるのは君自身だ。
君の意見を尊重したい。」
提督にそう言われて、漸く冷静になれた。
自分の状態を客観的に分析していく。

体調は……問題ない。機内は快適だったし、不調はないはずだ。
艤装は……問題ないだろう。確認はしていないが、前と同じままであれば全く問題はない。
心構えは……少し引き締め直そう。自分は瑞鶴。『航空母艦瑞鶴』だ。
その誇りを胸に、今日まで鍛練をしてきた。その努力は、決して裏切らない。
「……出撃、させて下さい。いえ、します！」
私は、今までよりも前に進みたい。立ち止まる、なんてことはしたくないんです！」
気付けば口にしていたその言葉。それに勿論嘘はなく。
恐らくここに来てから一番の声で言い切ったその言葉が、私の紛れもない真意だ。
「……分かった。君が出撃するからには、この刀に誓って言おう。
『必ず護り通す』と。私の戦い様、見届けてほしい。」
行こう、と言って提督は執務室を後にする。私と翔鶴姉も、その後に続いた。

五話　背水

穏やかな波が立ち、心地よい風が吹いていた場所に、砲弾による水柱が立ち始める。
つい先程まで南国の日常があったその場所は、一瞬にして崩れ去っていた。
「回避に集中しろ！反撃のことは考えるな！」
深海棲艦とそれに追われる艦娘達。
その艦娘の先頭で声を張り上げて指示を飛ばしていたのは、軽巡『天龍』だった。
ラバウル第一鎮守府で報告に上がっていた水雷戦隊は、天龍を旗艦とする第四水雷戦隊だった。
軽巡二、駆逐四の小規模な戦隊。
おまけに駆逐艦達はまだ練度が低い。
天龍ともう一人の軽巡、『由良』は十分以上の練度が有るものの、駆逐艦を庇いながらでは実力を発揮出来ない。
「天龍さん、どうする？このままじゃ、誰か追い付かれるかも。」
由良が天龍に対して問いかけた。
天龍はそれを受けて回避行動をしながらも考える。

由良の言う通り、不味い状況ではある。
駆逐艦達は戦場に慣れておらず、戦闘開始から十五分経った現在、疲労の色が見えてきている。
また、それに加え、敵艦載機の姿が認識出来ていない。
対空装備も十分とは言い難い。
「回避に専念だ。提督はそう言った。」
打開策が思い付くわけでもなく、苦し紛れにそれしか言えなかった天龍。
だが、ただ一つ光明が有るとすれば、提督が来ることだ。
……アイツが来れば、間違いなく勝てる。
それだけは揺るぎない事実だと、天龍は思っていた。
「とりあえず、由良、お前は艦隊の最後尾へ。遅れてる奴を後ろから押してやれ。」
「了解。」
二つ返事で、彼女は了承した。
最後尾が危険だとハッキリ理解した上でだ。
――無茶はしないでくれよ。
内心ではそう思いながら、改めて索敵と回避に努める。
レーダーは装備していない。

今回の出撃で、このような敵と遭遇するとは思ってもみなかったからだ。
……感覚を研ぎ澄ます。
レーダーが無くとも、感覚を用いればおおよそ検討も付く。
天龍はそれが出来る位には、戦場を駆けている。
後方から、敵駆逐、軽巡合わせて十。
戦艦はその部隊の更に後方から定期的に砲撃を加えてきている。
空母は見えず。
少なくとも、砲撃を加えている戦艦部隊の近くではない。
……定期的な砲撃？
引っ掛かった部分はそこだった。
決して砲撃後、再装填完了次第、順次砲撃、というわけでも無さそうだ。
それにしては、砲撃の間隔が空きすぎている。

――――まさか！
天龍がそう気づいたときは、もう遅かった。
「敵機来襲！数四十余り！」

由良が鋭く声を上げる。
そしてその時にはもう、敵機が視認出来る距離まで近付かれていた。
が、そこで天龍は致命的とも言えるミスをしていたことに気が付く。
暗礁地帯。
彼女は回避を急ぐあまり、周囲の確認を疎かにしていた。
そしてたどり着いた――誘い込まれたの方が適切か――場所が、そこだったという訳だ。
こんな所では回避行動など録に取れない。
歯軋りしながらも、天龍は指示を飛ばす。
「対空戦闘用意！死ぬ気で撃ち落とせ!!」
その指示を受けて、駆逐艦達も対空警戒体勢をとる。
しかし、その顔は戸惑いと不安で満ちていた。
由良が、それを見て、先ず彼女から対空機銃掃射を始めた。
駆逐艦も、それに続いて撃ち始める。
天龍も勿論、その後に続いた。
だが、それで撃ち落とせたのはほんの数機。
撃ち漏らした急降下爆撃隊、戦闘機隊が、遂に攻撃を始めた。

風切り音を帯び、爆撃機から、鋼と火薬の塊が落とされる。
それは殆どが海中へと没し、盛大な水柱を立てたが、幾つかは艦娘達の至近距離へと着弾した。
何人かの悲鳴が聞こえる。
天龍は襲いかかる敵機を相手に、果敢にも機銃を打ち込み、何機か撃墜していたものの……
「――――ッ！」
至近弾の破片が直撃し、体勢を崩す。
思わず閉じてしまっていた目を開き、直ぐに敵機に追撃をかけようとする。
だが、その少しの隙は、天龍を狙う敵にとってこの上ない僥幸であった。
「天龍さん!!後ろ！」
由良の声にハッとして後ろを見るも、もう遅かった。
……見下していた。
こんな物なのかと。
この程度で終わってしまうのかと。

天龍と目が合った深海棲艦は、そんなことを感じさせるような目で、

――――砲弾を放った――――

肌に感じる爆風と思われる風圧。
それとともに感じる熱。
感覚が残っている、ということは即死ではないのだと。
我ながら冷めた分析だ、と思いながらも天龍は恐る恐る目を開く。
しかしそこで目にしたのは、自分の体の一部に砲弾が刺さっている、という光景でもなく、
また、そもそも自分の体が、もう見るに堪えない状態であった、という事でもなく。

ただ目の前で、『刀を手に握りしめている』男の姿だった。

「遅くなった。」
短く謝罪の言葉と共に、男は口を開く。
だがそのぶっきらぼうともとれる言葉とは裏腹に、彼の目には明確な怒りが表れていた。
「提、督？」
由良が気の抜けたような声で、その男に問いかける。
男はそれに対し、ほんの少しだけ口元をゆるめて答える。
「ああ。私は君達の提督だ。」
そして、と提督は一旦区切り、改めて言い始める。
「君達を護り通すと誓った『司令官』だ。」

六話　迅雷

提督が、それまで片手に握っていた刀を、今度は正面に据え、両手で握りしめ直す。
構えをとり、正面の敵艦を真っ直ぐに見つめる。
深海棲艦達は、何が起こったのか判らないでいるようだ。
そしてそれは、第四水雷戦隊の面々の殆ども同様であり、天龍だけがそれを理解していた。
……提督は、天龍に向けて放たれた砲弾を文字通り『打ち落とした』のだ。
判っているとはいえ、天龍自身も、その事が何処か信じられないままでいる。
やはりやってのけたのだと、安堵と感心の念を感じる一方で、
艦娘でも成せない曲芸じみた事をする彼に、困惑する天龍。
彼女も刀を使い、戦場で戦った事はある。
だがそれは、乱戦の真っ最中での使用。
要は「振り回していただけ」であった。
彼女は決して、提督のように刀を使いこなせる、という訳では無い。
だからこそ、刀を使った戦闘はひどく困難なものであるということは理解していた。

生半可な膂力ではそもそも振るえず、身のこなしが分かっていないと、刀に振り回される。

――――提督は、そうではないのだ。

提督は静かに一歩踏みだして、すると一気に彼の目前にいた深海棲艦に迫っていた。

その深海棲艦は後ずさりをするも……

「遅い。」

その次の瞬間、「それ」は、ただの二つの鉄屑となっていた。

重巡クラスのはずの深海棲艦は、提督の刀によって、真っ二つに切り裂かれていたのだ。

周囲の深海棲艦に明らかな動揺が走る。

たじろぐ個体、提督を凝視する個体、そして、提督に明確な敵意を見せる個体。

そして、それらの内、最後に挙げた個体が提督に飛び掛かるようにして迫る。

が、提督はそれを予見していたかのようにその個体へ向き直り、

刀を滑らせ、胴を上下に切り裂く。

動じる様子もなく、ただ淡々と、しかしそれでいて静かな怒りを孕んでいる。

そんな提督の様子に、艦娘は勿論、深海棲艦も、呻き声すら上げなくなった。

「来い。束になって一斉にだ。」

その様子を見て、提督は挑発するかのような言葉を言い、
そして、構えを解いた。
深海棲艦がどう思ったのか、それは深海棲艦のみぞ知ることだが、
確実に、顔に怒りの相を浮かべているという事は、天龍にも分かった。
戦いの最中に於いて、武器の構えを解く。
それは深海棲艦にとっても、侮辱なのだろう。
遂に怒りに任せて飛び出した個体に続き、一斉に飛び掛かっていく深海棲艦達。
そしてそれを計画通りと見てなのか、提督は不敵な笑みを浮かべる。
ゆっくりと刀を構え、そして……

――――天龍が瞬きを二回し終わる頃には、半分が鉄屑となっていた。

それだけでは終わらない。
すかさず提督は鋭く踏み込み、後方で完全に油断していた戦艦型に肉薄する。
明らかに狼狽した様子のその個体は、しかし咄嗟に守りの構えを取る。

だが、それは失敗に終わった。
艤装を前面に持ち出したものの、それすら提督はいとも容易く切り裂く。
戦艦型は一度距離を取り、仕切りなおそうとしたのだろう。
後退をする構えを見せた。
勿論、提督がそれを許すはずはなかった。
短く息を吐きだし、斬る。
そこで、もう決着はついていた。
深海戦艦は不気味な断末魔を上げながら、ゆっくりと海底へと沈んでいった。
それを見届けてから、ようやく、提督は刀を鞘に納める。
戦いが、終わったのだ。

……何もできなかったな。
天龍は拳を握りしめ、歯軋りする。
提督は強い。
それはそれは、強く。
艦娘である自分よりも強いのではないだろうか、そう思わせるほどに。

そう言えば以前も、同じように助けて貰った。
あの時はまだ着任して間もない頃。
結局、あの時と同じく、何も出来ずにただ茫然としていた。
自分はあの頃から変われたのだろうか。
自分はあの頃から前に進めたのだろうか。
そんな疑問が頭を駆け巡っていた時。
不意に誰かの手が、自分の頭の上に乗せられる。
「よくやってくれた、天龍。
　旗艦の務め、よく果たしてくれた。」
提督だった。
提督はその手で優しく頭を撫でていく。
「お、おい。子ども扱いするなっ！」
そんなことするな、と顔を赤くして怒る天龍だが、提督の手は払わずにいた。
――少しだけ、安心するから。
天龍は死の瀬戸際にいたのだ。
そこでようやく、今まで張りつめていた気を緩ませる。
「君はちゃんとやったさ。

　旗艦の務めは何だ、その答えを覚えているか？」
そう言われて、天龍は気付く。
そもそも自分は、見当違いなことを考えていた、ということを。
提督は何時だって言う。
曰く、上に立つ者は、必ず下の者と共に在るべきと。
曰く、上に立つ者は、真っ先に下の者の安全を考えるべきだと。
曰く、上に立つ者は、下の者を『護り通す』責務があると。
天龍は提督の問いに対して、頷いた。
いや、頷く事しかできなかった。
「君は部下の事を考え、最善の策を取った。
　結果として君は、一隻も轟沈させなかった。」
それなら、と提督は続ける。
「旗艦の務めは果たしたといえるだろう。
　お疲れ様、天龍。」
……そんなこと、言うなよ。
天龍にとってその言葉は、他のどの言葉よりも嬉しいものだった。
だからこそ、そんなこと言われたら困るのである。

「泣きたくなっちまうじゃねぇかよ……」
提督にすら聞こえるか聞こえないか、そんなか細い声で、天龍は呟いた。
結局、天龍はどうにか涙を堪えて、そっぽを向くのだった。

七話　飛翔

「どうだった、瑞鶴？」
翔鶴姉のその一言で、ようやく意識を戻す。
私は、偵察機の妖精と視覚同期をして、さっきまでの提督の様子を見続けていた。
……勿論、覗き見が悪いことであるのは分かっていたけど。
だが目を見張るような光景ばかりだったのだ。
提督が砲弾を刀で撃ち落としたり、刀で深海棲艦を叩き斬ったり。
それら全てが今まで見たことも聞いたこともない離れ業。
当然目を離せるはずもなかった。
「……よっぽど驚いていたのね。
　そうなるのも無理はないわ。私も初めて見た時は、貴女と同じような感じだったんだもの」
翔鶴姉の言葉を聞いて少し安心する。
あれは決して通常ではないことを確認できたから。
ただ、意外だったことはそれだけではない。

上から見ていたから分かるが、先程まで提督は、一人の艦娘と親しげに話していた。
……正直有り得ない事だった。
呉では、どんな理由であれ、中大破した艦娘は必ずと言っていいほど罵声を浴びせられていた。
それを叱るわけでもなく――それが当然であってほしいが――優しく微笑みかけているのが衝撃的だった。
「……ねぇ、翔鶴姉。
提督は、いつもあんな感じなの？」
ふと、尋ねたくなった。
驚くようなことばかりで確認したいというのもあったが、もう一つ、意味を含んだ問いだった。
翔鶴姉はすぐにその問いに答えてくれた。
「ええ。提督が毎回陣頭指揮を執ってるわ。
そしてその後には必ず、みんなに声を掛けて回っている。」
――嬉しいけれど、危険だということをもう少し理解してほしいわ。
何処か困ったように最後付け加えて言っていたが、それと同時に、誇らしげに語っているようにもに見えた。

『もし、私の期待にそぐわない人物であるなら……』
私が提督に初めて会った時の言葉。
『もし』なんて言葉は付け加えるんじゃなかったな、と今更ながら後悔する。

ちょうどその時だった。
「……瑞鶴、居たわ。
　戦艦四、空母二、他護衛艦多数。敵の主力ね」
一転引き締まった表情で、翔鶴姉が言う。
覚悟も決まった。
ならば、私が持つすべてを、敵にぶつけるのみ。
「翔鶴姉、行くよ！」
矢を弦に番え、構える。
「ええ。勿論」
翔鶴姉も続けて、構える。
水平線の彼方に向け狙いを澄ます。
呼吸を整え、ゆっくりと弦を引く。

決して気の抜けない作業だ。
ここでの良し悪しが、艦載機の稼働に影響を与える。
静かに狙い、そして……
「第一次攻撃隊、発艦始めっ!!」
弓を離れ、一本の矢が大海原へと駆け出す。
少しして、それは段々と変化していった。
日差しを跳ね返す金属光沢。
耳に残る発動機の駆動音。
――成功だ!
少しだけ顔を綻ばせ、飛び立った艦載機たちを見守る。
不安はあったが、問題なく、またとても良い状態で送り出せた。
これならば……
「一、二、三……
やったわ!敵艦五隻の撃沈を確認よ!」
――よしっ!
内心ガッツポーズをして喜ぶ。
あとは、戦果の確認と、第二次攻撃隊の発艦の準備を……

――――目が合った。

青白く光り輝く目を見てしまった。
しまった、と思った時にはもう遅かった。
敵の空母から艦載機が次々と発艦していた。
それどころか、直衛艦や戦艦たちも前進を開始していた。
当然、攻撃目標は私たち。
隣の翔鶴姉も私と同じく大きく目を見開き、茫然としていた。
……どうすれば、どうすれば……！
悩んでも見つからない。
答えが、最適解が思いつかない。
このままじゃ……

「艦載機だ！敵空母を狙え！」

何処からともなく、声が聞こえてきた。
だがその声は、固まったままだった私を一瞬で突き動かした。
矢筒から矢を抜き放ち、即座に番える。
狙いは驚くほど速く、そして正確に定まった。
「第二次攻撃隊、発艦始めっ!!」
再び艦載機たちが航空隊を結成して、大海原へ飛び立つ。
やや遅れて翔鶴姉も同様に、艦載機を射出した。
そこでようやく、私は声がした方を向いた。
そこにいるのが誰か、なんてことは最早分かり切っていた。
しかしそれでも、それでも『あの戦い方』を確かめてみたかった。

「待たせたな」
短く私にそう告げて、彼は敵の群れに向かって突撃していく。

白刃は恐ろしいほどまでに煌めいていて、それだけで後の展開を予感できた。
――ひとつ。
真正面から彼とぶつかることになった敵の深海棲艦は、私が瞬きした一瞬で鉄屑と化していた。
――二つ。
彼の横から飛び出してきた別の個体は、返す刀で両断された。
――三つ、四つ、五つ。
一斉に飛び掛かった深海棲艦達だったが、それでも彼の歩みを止められない。
いや、止めるどころか更に加速していっている。
提督は敵輪形陣の中央の空母を狙っているようだった。
道を塞ぐ敵艦は即座に斬り捨て、距離を詰めていく。
そこに来て敵空母は提督に艦載機を差し向けた。
当然の反応と言えばそれまでだが、しかし……
「今だ！」
上空に待機させておいた攻撃隊を一気に急降下させる。
敵艦隊上空の守りは殆ど無い。
これなら、いける！

風切り音と最高出力時独特のエンジン音が響く。
敵が上空を見上げた時は、すでに手遅れだった。

轟音。
轟音。
轟音……

一度だけではなく、二度、三度……
炎と煙の中で青白い瞳の色が一瞬一際光り輝き、そして消えてゆく。
形容出来ない程の恐ろしい断末魔を上げながら、その身を海に沈めてゆく。
「……やったの、私……？」
敵艦の多くが沈んでゆく。
さっきまでは想像すら出来なかったそんな光景を前にして、気の抜けた声を出す。
「ええ、貴女が仕留めたのよ。
敵空母二、戦艦二、重巡一……

大戦果よ、瑞鶴！」

翔鶴姉がそう言うが、まだ信じ切れていなかった。

唖然、茫然、とにかく呆けた顔で私は海の上に突っ立っているのだろう。

ただ、そんな私でも、燃え盛る海の中から、一人の男が現れたのを見つけることが出来た。

白を基調とする軍服、海軍第二種軍装を身に纏い、腰には刀を佩いている。

煌々と燃え盛る炎の中でも、一際目立つその出で立ち、そしてその瞳。

瞳の中に宿す炎は、彼の背後の炎よりも激しく燃え盛っていた。

「翔鶴の見込み通りだったな」

開口一番、彼が言った感想。

それは恐らく本心で、だからこそ――何となくだが――驚いているように感じた。

表情には、幾分か驚きの色が表れている。

驚いているのは、やはり当然だろうと思う。

自分ですらこのような戦果を挙げたことを信じ切れていないから。

ふと、彼の表情が柔らかくなる。

「流石、よくやってくれたな、瑞鶴」

さっきまでとは違って、明るい笑みを浮かべて言っていた。
本当に、ついさっきまで殺気を孕んだ表情だったのが、今は打って変わって笑顔。
不思議と、私は照れ臭くなる。
――あの時の天龍さんは、こんな気持ちだったのかな。
私が求めていた言葉。
私の成果に対する素直な賛辞。
そして。
私を安心させてくれる背中と、その笑顔。
敵わないな、と思う。
提督がこんなことを言うなんて、思ってもみなかった。
「提督、いや、提督さん」
私は意識せずに言葉を発していた。
一瞬驚いたが、でも、伝えたいと思うことはすぐに出てきた。
「私、まだまだ頑張るから！」
この人の役に立って見せる。
この人の力になって見せる。
私はそう決心した。

へぇ、とつぶやきを漏らす。
「彼女、いい腕してるじゃない」
出撃任務を終えて帰投する最中、鎮守府から打電があった。
どうやら、戦闘中の味方艦隊がいて、窮地に立たされているらしい。
全速力で救援に駆け付けようとしたが、私たちが到着する前に戦闘は終了したようだ。
偵察機の観測で確認出来た。
私が特に気になったのは、翔鶴の隣に居た子。
提督の助力があったとはいえ、戦果としては素晴らしいものだ。
――それにどうも、提督も気に入っているみたいだし。
あくまで直感、されど直感。
直感は非常に役に立つ物だと、私は知っている。
彼女が気になるのは山々だが、先ずは報告を。

無線機を手に取って、鎮守府へ報告する。
「第二艦隊、旗艦『飛鷹』、只今帰還しました」
鎮守府へ帰投してから、彼女に会うこととしよう。

八話　母港

鎮守府に着任してから三日が経った。
依然慣れない部分はあるが、決して苦しい訳ではない。
当然呉とは比べるまでも無いほどだ。
出撃任務は着任初日以来一度も無い。
この三日間で提督や手の空いた艦娘たちに鎮守府を案内してもらった。
特に不思議なところは無かった。
南洋方面最大級の鎮守府と聞いていたから、呉と同規模な設備を持っていることにもさして驚かなかった。
空調も各部屋にまで完備されているし、間宮食堂のメニューも内地と寸分違わなかった。
しかしやはり南洋とあってか氷菓は他鎮守府よりも人気だそうだが。
総じて快適な鎮守府だと思った。
それに加えて提督が驚くほど仕事に熱心だ。
これ以上の鎮守府は中々ないはずだ、と思う。

最初は最前線の鎮守府ということで身構えていたが、最近はその緊張も解れつつある。

「お、おはようさん、瑞鶴」

「おはようございます、龍驤さん」

鎮守府を案内してくれた艦娘の一人、『龍驤』さんが挨拶しながら手を振ってくる。

彼女は明るく気さくな人柄で、私にとっては頼れる先輩空母と言うような存在。

気が楽になったのも、この人のお陰かもしれない。

「どう、ここにはなじめそうかいな？」

「ええ、先輩のお陰で」

「ほほーう！それはちょっち嬉しいなー♪」

少し上機嫌になってくれたようだ。

顔が綻んで嬉しそうにしてくれる。

「ああ、それはそうとして……」

と、龍驤さんははっ、となってこちらに向き直る。

「司令官が呼んどったみたいやけど」

「提督が、ですか？」

……？

何かまだ私に伝えてなかったことがあったのだろうか。
「そうや。会わせたい娘がいるとかなんとか」
まあ、多分あの娘やろうけどなあ、と呟きが聞こえてきたが、どうやら誰かと会う必要があるらしい。
「分かりました。早速行ってみます」
「おう、また後でなー」
終始にこやかな表情で接してくれた龍驤さん。
……今から会う人もこんな人だったらいいのだけれど。
少しの期待と非常な緊張を持ちつつ、執務室へと急いだ。

「ねえ、提督」
「何だ？」
「才能って何だと思う？」
「何だ、藪から棒に」

「いや、何となく聞きたくなっただけ」
執務室。
鎮守府を一望できるこの場所は提督の作業場。
提督自身は基本的にここで事務処理をしているが、私は彼が何時も鎮守府の様子に気を配っていることを知っている。
『気』が必ず鎮守府全体にも向けられている。
これは常人では中々出来ない事。
彼の場合、鎮守府の何処かで何かがあれば、すぐに駆け付ける用意が出来ている。
書類を片手にした状態でも。
「私は提督みたいな人が『才能』を体現してると思うけど」
「何を言う。私など、ただ努力を積み重ねただけの凡人だ」
「私はそうは思わないけどね……」
彼は何時もこうやって否定する。
自分の事を必ず卑下ないし尊大に扱おうとしない。
自分の事を誇らない。
自分の事を認めない。
決して悪いことではないが、当然良い事ではない。

彼は自分の持つ美点がそのまま欠点に繋がっている典型例だろう。
そんな彼を見てると少し悲しくなる。
「それよりどうだ、瑞鶴は」
「ああ、あの娘！」
若干話が逸らされたようで少し不満はあるが、それよりも大きなことを思い出した。
そうだ、彼女だ。
提督に何度も頼んで、そしてようやく今日会える。
彼女の初陣からまだ一度も話せてない。
話したいことは沢山ある。
三日も待ったのだから色々こっちは考えてきたのだ。
「……珍しいな、君がこんなに人と会うのを楽しみにするなんて」
「少し失礼よ、提督」
提督はさっきの事といい、今の事といい、一度はっきり言わなければならないだろう。
でもそれは、彼女と会ってからでも遅くはない。
「さっきの話の続きだけどね」
提督に向き直って口を開く。
「彼女、瑞鶴もその『才能』を持ってると思うのよ」

執務室前にたどり着いた。
まだ慣れないので一瞬迷いかけたが、無事到着。
「――――どうだ――――は」
「ああ、あの娘！」
扉の向こうから聞こえてくる声から察するに、合うべき人物は中にいるようだ。
緊張、緊張、そして深呼吸。
「よし！」
決心を固めて執務室の扉に手を掛ける。
……早くここにも慣れたいなあ。
「翔鶴型航空母艦二番艦、瑞鶴！入ります！」
少々勢いよく扉を開くと、そこには提督ともう一人、艦娘がいた。
軍服に巫女袴。
奇妙な組み合わせの衣装だが、不思議と彼女からはその奇妙さを感じない。

そしてその体から溢れる何か。
闘気、覇気、はたまたオーラというものか。
彼女のそれは他の艦娘とは一線を画していた。
「……貴女が！」
と、その彼女が顔をパッと明るくする。
そして自然な手つきで手を差し出してくる。
「はじめまして。飛鷹型航空母艦一番艦、飛鷹よ。どうぞよろしく」
笑みを浮かべて挨拶をしてくれる。
慌てて私も彼女の手を取る。
「よ、よろしくお願いします……」
若干気後れしつつも、返礼をした。
……あれ、この人今、『飛鷹』って……
「早速だけど、一ついいかしら」
飛鷹さんが口を開く。
もしかしてこの人が、翔鶴姉の言っていた人……？
「貴女、私と戦ってみる気、ある？」

九話　演習

『それでは、只今より航空母艦飛鷹と、航空母艦瑞鶴による演習作戦を開始致します』
通信機から大淀の声が聞こえてくる。
結局飛鷹さんとの演習は、提督が私の同意もあって渋々了承するという形で行われることとなった。
提督が何故そこまで反対するのか見当はつかなかったが。
それだけ、私と飛鷹さんの間で実力差があるのか、それとも他に理由があるのか……
そこだけが懸案事項ではあったが、逆に言えばそれだけだ。
この演習は必ず私にとって良いものになるはずだ、と直感で感じ取った。
例えすぐに敗れてしまっても、完敗してしまっても。
私には無い何かを、あの人は持っているように感じた。
『準備はいいか、二人とも』
立会人として観戦している提督が問う。
「瑞鶴、準備完了致しました」
『飛鷹、こちらも準備オーケーよ』

私と飛鷹さんの返答を受け、提督が一度頷いてから、
『〇一〇〇。これより演習作戦を開始する』
静かな開始号令。
それを受けて、私はまず偵察機を発艦させる。
今回の演習は、通常の艦隊戦とは異なり、単艦同士の戦いとなる。
互いの位置は知らされておらず、偵察機か目視による敵艦の発見から始まる。
殊に空母に於いては偵察が肝心となり、敵を先に発見できた方が艦載機を早く発艦できるため、圧倒的に有利となる。
敵艦に対する近接防御兵装を持たない空母は、このフェイズの勝敗がそのまま戦闘の勝敗に繋がるのだ。
「……居た！」
演習開始から十分後、偵察妖精からの報告で、敵艦を発見。
相手はまだこちらに気付いていない様子。
これなら……
と意気込みながら、矢筒に手を伸ばし、弓を構える。
「第一次攻撃隊、発艦！」
今回は相手が空母一隻の為、直掩隊を残し全機発艦させた。

合計で六十機程度の大編隊。
これによる攻撃をすべて避けきることは、ほぼ不可能に近いはず。
半ば確信をもって艦載機隊の目標到達を待つ。

……すると不意に、偵察機からの通信が途切れる。

偵察機は他にも飛ばしてあったので、すぐに再度追跡を試みるも、
「……消えた？」
さっきまでその場所に居たのに。
目を離したのはたった数秒程度なのに。
更に悪いことに、今度は別の偵察機がやられた。
一機、一機、また一機と。
忽然と偵察機から連絡が入らなくなっていく。
マシンエラーを疑うが、しかし演習前にしっかりと点検をしたのでそれはないはず。
あまりにも突然すぎる出来事に少々気味の悪さを感じる。
――何か重大な見落としがあるのではないか。
そう思った瞬間、最後の偵察機から打電が。

『敵艦載機ノ大編隊ヲミユ』

慌ててその偵察機の妖精と視覚同期を試みるも、しかしそのすぐ後、通信途絶。

敵の姿を見ることなく、私は偵察の手段を失ってしまった。

代替手段が無いことは無い。

しかしこのまま艦載機隊を無暗に突撃させるのもリスクが大きい。

一旦彼らを呼び戻すことにした。

……幾つか疑問点がある。

まずは偵察機の通信途絶。

これは敵による攻撃には間違いないだろうが、しかし最後の機体以外敵の姿を認識出来なかったことに疑問がある。

対空砲火により撃墜されたということはまずありえないはずなので除外するとして。

敵機による高高度からの急降下奇襲が次に挙げられるが……

これを行うにしても、中々考えにくいことである。

偵察機は当然ながら下方に意識を集中させていたのでこの説が可能性としては最も高い。

しかし、襲撃を行った敵機はどんな役目を負っていた？

――――直掩隊？

それにしては余りにも高度が高すぎる。
――――攻撃隊？
可能性はあるが、こちらを発見しても無いのに？
次に敵の大編隊が何故いたのか。
先程の考察と被る部分もあるが、こちらを発見していないはずの状況で何故？
こちらの直掩隊は四方八方で警戒を厳にしていた。
この監視網を掻い潜るのは殆ど不可能なはずである。
疑問は解決しなかったが、続く思考を打電が遮る。
『敵編隊ト交戦中』
撤収の判断は一歩遅かったようだ。
次に打つ手を考えるが、敵艦の場所が分からなければ意味がない。
八方塞がりかと思っていた私に、またもや打電。
『前方二敵艦発見』
直掩隊からだった。
前方を見れば、なんと本当に居た。
しかもグングンと加速していて、距離が詰められていく。
相手は雲を利用して接近してきたのだと感心する一方で、しかし何故距離を詰めるの

か。
だが好機ではある。
直掩隊と幾つか交戦を免れた味方機に敵艦への攻撃を命じる。
まず戦闘機隊が機銃掃射で攻撃を仕掛ける。
しかしこの攻撃をいとも容易く、不敵な笑みを浮かべる相手に悉く躱される。
次に爆撃機隊の攻撃。
が、相手は攻撃が来ると分かるや否や、いったん急停止することで攻撃を躱し、至近弾が起こす水柱を利用してまた距離を詰めてくる。
そして最後の雷撃隊も果敢に攻撃を仕掛けるも――――
まるで当然のように全弾躱される。
この時点で敵艦との距離は凡そ一キロ。
それでも相手は加速し、むしろ好機とばかりに加速している。
相手の意図は分からなかったが、しかし接近されるのは不味いと思い、後退を開始する。
――――何か、何かを仕掛けてくる。
その何かが分からず、固唾を呑んで、手に汗握り、冷や汗すら浮かぶ状況。
ふと、相手を見失う。

――何処だ、何処だ！
周りを見渡してその姿を追う。

一瞬の静寂。

自らの鼓動以外何も感じられないような極限状態の中、背後に何かを感じた。
だが私が振り向くより早く……

「空母にはね、こういう戦い方があるのよ」

手を自分の背中に当てられ、短く息を吸う音が聞こえる。
危険を感じて咄嗟に躱そうと身を捩るも、一足遅く。

瞬間、世界が反転する。

しばらくして、自分が海面を転がり始めてようやく自分がどうなったか悟った。
発勁。

それも生半可なものではない。
自らが吹き飛んだ距離は凡そ五十メートル。
身を捩っていなければもっとだっただろう。
何とかそこから立ち上がるも――フラフラとして本当に余裕はなかった――提督からそこまで、と連絡が入る。
――ああ、負けちゃったか。
鈍い痛みを感じつつも、何処か悪い気分はしなかった。
すると、飛鷹さんが近づいてくる。
「正直驚いたわ。あれを食らって立ち上がることが出来るなんて」
そう言って、肩を貸してくれる飛鷹さんに、やはり歴然とした力の差を感じた。
というか、飛鷹さんも驚いていたけど、あんな攻撃を食らってなお立ち上がれたことは、自分でも奇跡と思う。
「お疲れ様。貴女、とても強いのね」
飛鷹さんの賛辞を聞いた途端に、
飛鷹さんの肩に身を預けた途端に段々と瞼が重くなっていく。
これはいけない。
先輩にこのままじゃ迷惑をかけてしまうと思いつつも、しかしどうしても抗えず。

「すみません、少し、休んでもいいですか……」
私は完全に瞼を閉じてしまった。

「やりすぎだ。瑞鶴に何かあったらどうするつもりだ」
少し不満げに言う提督。
それは勿論そう思ったけど……
「いやね、ああしなければもしかしたら私は負けてたかもしれないのに」
そう。
瑞鶴の航空攻撃には無駄が無かった。
私の攻撃を食らったその瞬間にも、彼女の艦載機は稼働を続けていた。
これは正直驚くべきことだ。
艦娘の艤装は、それを身に着けている者に極度の身体的負荷がかかると稼働を停止するようになっている。

これは艤装を動かす妖精たちに力の供給が行かずに妖精が活動を停止してしまうためである。

無論艦載機も例外ではない。

今回はその後の私の追撃までこなす力が残ってなかったようだが、もしもう少し攻撃が彼女によって逸らされていたなら。

「やっぱり、彼女には才能があるわよ」

隣で瞳を閉じたままの瑞鶴には、他と違うものがある、そう確信した。